

徒然草 つれづれぐさ

兼好法師 けんこうほうし

平安時代	
1000頃	『枕草子』 <small>まくらのそうし</small>
1008頃	『源氏物語』
12c	『今昔物語集』 <small>こんじゃく</small>
1185	平家滅亡 <small>めつぼう</small>
鎌倉～室町時代	
1205	『新古今和歌集』 <small>こきん</small>
1212	『方丈記』 <small>ほうじょうき</small>
1235頃	『小倉百人一首』 <small>おぐら</small>
13c頃	『平家物語』
1331頃	『徒然草』
1338	室町幕府開く
1600	関ヶ原の戦い <small>せきがはら</small>
江戸時代	
1603	江戸幕府開く
1685	生類憐れみの令 <small>しょうらいあわ</small>
1694頃	『おくのほそ道』

徒然草 鎌倉時代の末期に、兼好法師によって書かれた随筆。二

四三段からなり、自然、人生、社会などさまざまなる事柄が、多様

な視点から描かれている。

【参考「仁和寺」】

仁和寺は、京都市右京区御室おむろにある、真言宗御室派の総本山です。八八六（仁和二年、光孝天皇が鎮護国家の道場として造営を発願し、その志を宇多天皇が継いで八八八年に完成させました。のちに宇多天皇が出家して仁和寺の法皇となり、以降、代々皇室出身者が住職（門跡）を務め、平安時代から鎌倉時代には門跡寺院として最高の格式を保ちました。

その後、応仁の乱（一四六七～一四七七）で、ほとんどを焼失しましたが、江戸時代に再建されました。一九九四年に「古都京都の文化財」の一部としてユネスコの世界文化遺産に登録されました。



明治時代に撮影された仁和寺  
（『京都名所帖』明治時代／国会図書館デジタルコレクション）

【参考（兼好法師による読書のすすめ）】

ひとり灯のもとに

ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とすることで、こよなう慰むわざなる。

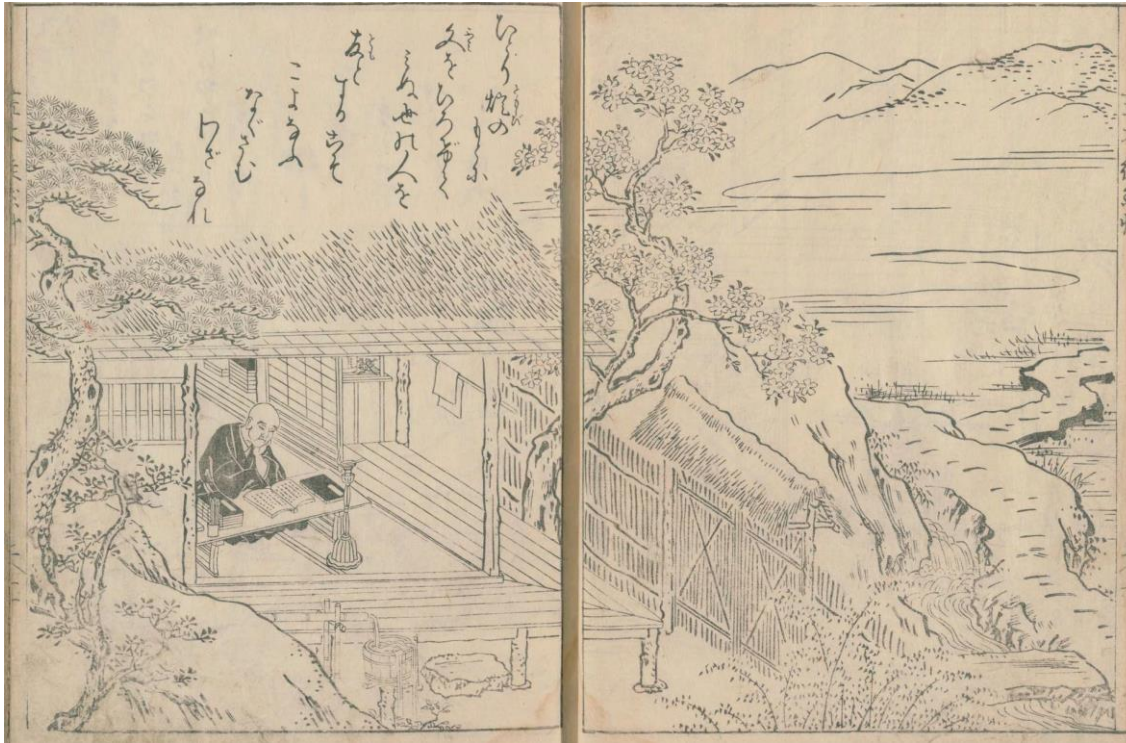
文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この国の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれなること多かり。（第二三段）

ただ一人、灯火のもとに書物をひろげて、見も知らぬ昔の人を友とすることこそ、何にもまして、心慰むわざである。

書物は、『文選』の感銘深い巻々、『白氏文集』、『老子』や『莊子』の言葉など。わが国の博士たちの書いたものも、昔には感銘の深いことが多いものだ。

\* 「文は……」と書名をあげる表現は、『枕草子』に学んでいる。

\* 文選 中国、南北朝時代、梁の武帝の子である昭明太子（五〇一―五三二）によって編纂された詩文集。『白氏文集』とともに王朝時代以来、貴族の教養の書として愛読された。『徒然草』にもたびたび引用される。



『絵本 徒然草』（国会図書館デジタルコレクション）

\* 白氏文集 中国、唐の詩人、白樂天（白居易）（七七二―八四六）の詩文集。

\* 老子 中国、春秋戦国時代の思想家、老子によって記されたとされる『老子道徳経』のこと。

\* 南華 『莊子』のこと。中国、戦国時代の莊周の著書とされる。